

2011年度 政治経済学

小倉利丸

ogura@eco.u-toyama.ac.jp *

2011年11月17日

6 労働過程一般と資本主義的労働過程

6.1 概観

資本が流通だけでなく生産を支配するためには、生産過程を資本の価値増殖運動の内部に包摂する特殊なメカニズムを必要とする。その要となるのが、＜労働力＞の商品化である。社会人口の大半が、共同体的な自給や非市場経済に基づく経済活動によって生活している限り＜労働力＞商品化が社会的大量現象としては生じない。＜労働力＞が繰り返し労働市場に供給されるためには、生活手段（生活必需品）を市場で購入し、この購入に必要な貨幣を取得するために、労働市場で＜労働力＞を売するような新しい労働と生活の関係が社会の経済構造に組み込まなければならない。

前回、＜労働力＞商品化とはどのようなことを意味するのかについて、＜労働力＞の売り手と買い手の売買関係に即して説明したが、今回は、＜労働力＞の売買が成立（雇用契約の成立）した後に、実際に行われる労働の現場（労働過程）について述べる。

労働という行為は、私たちの日常的な常識に照らしてみた場合に、どのような行為が労働と呼ぶべき行為なのかについては、一見すると明瞭であるように見える。しかし、そもそも労働とはどのような人間の行為を指して定義されるのか、ということを理論的に突き詰めてみた場合、労働の定義と私たちが日頃「労働」と考えている行為との間には微妙だが重要な差異があることがわかる。すでに、前回述べたように、家事労働などに典型的にみられるシャドウワークも労働の範疇に入れるべきなのだが、こうした非市場経済的労働の場合には、労働と非労働の境界をどのように定めるのかはかなりやっかいな問題である。また、資本の下での労働時間のなかにも、さまざまな労働と呼んでよいのかどうか、境界領域にある行為が多々見出せることも事実である。こうしたことを以下では、さらに理論的に分析することを試みる。

6.2 労働過程

6.2.1 定義

資本主義に固有の労働のあり方を論じる前に、マルクスはどのような社会にも見出せる労働過程の一般的性質について論じている。

* 携帯 070-5553-5495

労働は第一に人間と自然の間に介在する一過程、人間が自分自身の行為を通じて自然との新陳代謝を仲介し、調節し、制御する一過程である。人間は自然素材に対して自分もまた一つの自然力として向き合う。人間は自分の生活に利用できる形で自然素材をとりこむために、腕、脚、頭、手など自分の肉体に備わっている自然力を活動させる。この運動を通じて人間は自分の外なる自然に働きかけ、それを変化させるが、同時にそれによって自分自身の本性も変化させる。人間は自分の本性のなかに眠っている潜在能力を発展させ、その力の活動を自分の統率下におく。

労働過程は、使用価値産出のための目的に沿った行為である。それは人間の欲求充足のための自然的なものの摂取、人間と自然の新陳代謝の一般的条件、人間の生を規定する永遠の自然条件である。したがってそれは人間の生のいかなる形態にも依存せず、すべての社会形態に等しく共通なものである。

上の引用文にある「人間」とは個人なのだろうか？それとも集合名詞としての人間なのだろうか？^{*1}労働は人間一人一人の行為であるという観点からすれば一人の人間＝個人であると解釈できるが、他方で、ほとんどの労働は、人びとの相互の連携なしには成り立たない（労働に必要な道具や原料は別の人間の労働に依存しているとか、おなじ職場でお互いに協力したり分担して労働するなど）。つまり、労働を単独の個人の行為と理解して一般的な定義を与えることが妥当かどうかという問題が生じる。この意味でいえば、ここでいう「人間」とは、単数形であってもある種の集合名詞としてとらえるべきだということになる。もし集合名詞と解釈した場合、「人間の欲求充足のため」というときの「欲求」も、労働当事者個々人の欲求ではなく、ある誰かの欲求充足のために複数の人びとが労働を提供するというような場合も含まれることになる。しかし、他人の欲求充足のためになぜ自分が労働をするのか、という動機の問題が論じられていない以上、集合名詞として「人間」という言葉を解釈することも無理がありそうだ。ここでマルクスが想定している「人間」が個人なのか複数なのかが曖昧になっているということが、後の労働過程の議論においてはやっかいな問題をもたらすことになる。

6.2.2 人間労働の特異性：動物との違い

動物であれ人間であれ、何らかの活動を行うということ、あるいは上の引用での表現を用いれば自然との新陳代謝は、外部の環境との関わりを意味するといえる。この限りでは人間も動物も変わるところはない。しかし、労働とよばれる行為を動物は行わない。労働はヒトに固有の行為であるというのがマルクスの理解であった。

どんなに下手な大工といえども、どんなに上手なミツバチよりはじめから優れている点がある。それは大工が口ウで巣を作る場合には、それに先だって頭のなかですでにそれを作り上げているということである。労働過程の終わりに出現するのは、その開始時点にすでに労働者の表象のなかに、つまり觀念として存在していたものにほかならない。労働者は自然に存在する物の形態を変化させるだけではない。彼は自然に存在する物のなかに自分の目的を実現する。彼はこの目的を知っており、この目的は法律のように彼の行為のあり方を決定し、彼はこの目的に自分の意志を従属させなければならない。しかもこの従属はばらばらの行為ではない。労働する諸器官の行使のほか、目的に向かう意志が注意力という形をとって現われ、それが労働の全継続期間を通じて必要とされる。しかも労働自体の内容や手法が労働者にとって魅力に欠けるものであればあるほど、つまり労働者が肉体的精神的諸力の遊戯として労

^{*1} 原語では der Mensch となっており単数形である

働を楽しむ度合いが少なければ少ないほど、この意志はいっそう必要となる。

最後の箇所で「遊戯として労働を楽しむ」という表現があるが、遊びはその行為それ自体が目的であるが、労働は目的を達成するための手段としての行為である。したがって、遊戯としての労働ということは厳密に言えば成り立たない。^{*2}ここでマルクスが指摘しようとしたのは、労働が遊びのように、喜びやおもしろい行為、目的はともあれそれ自体が生きがいと感ぜられる場合もある、という点にあると解釈すべきだろう。つまり、労働は、遊びそのものではないにしても、「遊戯」に近いような場合すらありうるということが示唆されているとみるべきであろう。このように労働は、苦痛であることもよろこびであることもありうるのであって、労働を個人の感情や感じ方を基準にして定義することはできない。ただし、以下で述べるように、労働する意志という問題は、労働が自己の必要としての労働である場合と、資本の必要のための労働である場合とは大きく異なる。この点は資本主義的労働過程を論じる場合の非常に重要な論点でもあり、同時にマルクスの労働過程一般に関する定義が果たして妥当な考え方であるのかどうか、というより根本的な問題にも関わる。

6.2.3 労働対象

これらを説明した後で、マルクスは「労働過程を構成する単純な要素は、第一に目的をもった行為、すなわち労働そのもの、第二にその対象、第三にその手段である」と述べ、労働過程の詳細について述べている。

労働対象には、自然そのものとすでに人の労働が加えられた対象に分類できるとして自然の役割についても触れながら次のように述べている。

もともと人間の労働のために食糧や、そのまま利用できる生活手段を提供している大地（経済的には水も含まれる）は人間の手を加えなくとも人間労働の一般的対象として存在している。労働によって大地との直接的な結びつきから引き離されるにすぎない事物は、すべて天然に存在する労働対象である。たとえ自分の生活基盤たる水から引き離されて捕らえられる魚、原生林で伐採される木、鉱脈から採取される鉱石などがそうである。それに対して労働対象自体がすでに過去の労働によっていわば濾過されている場合、われわれはそれを原料と呼ぶ。たとえばすでに採掘されて洗鉱を錬鉱石はこれにあたる。

人間の手が加えられていない自然は、労働と生産の大前提である。土地そのものだけでなく、水や空気といった人間の生存そのものの基盤があってはじめて人びとの労働も成り立つ。この当たり前の大前提は、工業化のなかで忘れられ、自然は生存の前提であるというよりも、工業生産に必要な原料を供給するにすぎないものへと格下げされてしまう。その結果が自然生態系を破壊したり労働環境の悪化にともなう労働者の労働現場における健康被害などが起きるようになる。

上の引用で「原料」と呼ばれている部分は以下で述べる労働手段と異なって、労働を終えた後にはすべて生産物（および廃棄物）として姿を変えることになる。また、上の引用にある「過去の労働」という概念は重要である。生産は現在の労働にのみ依存しているのではなく、過去に行われた労働に大きく依存している。次回述べるように、この過去の労働をどのように評価するのかについても資本主義は特殊な評価の機構をもつ。何百年も以前に採掘された金は貴金属として現在でも利用できるが、このような過去の労働は過去のその当時の

^{*2} たとえば、子どもと遊ぶことは、親にとって遊びともいえるし労働ともいいうる。子どもを養育するという目的のための手段として子どもと遊ぶというように捉えれば、労働であるし、保育園などで保育士が子どもと遊ぶことも遊びという労働ということになる。しかし、当事者の主観的な感情という観点でみれば、労働などとは考えず純粋に遊んでいると感じている場合がある。ここで問題にしているのは当事者が労働とみなしているのか遊びとみなしているのかではなく、その行為が社会的な文脈のなかで労働とよびうるような、目的のための手段になっているかどうかである。

社会的労働によって評価されるのではなく今現在の市場の評価によって評価換えされる。

6.2.4 労働手段

労働者は素手で労働するわけではなく、道具や機械を用いる。こうした道具や機械を労働手段と呼ぶ。

労働手段とは、労働者が自分と労働対象の間に割り込ませ、労働対象への彼の行為の導き手として利用する物ないし物の複合体をいう。労働者は物の機械的、物理的、化学的性質を利用し、自分の目的に応じて他のものに力を及ぼす手段としてそれらを作用させる。(略)労働手段の使用と創作はある種の動物にも萌芽としては見られるが、それはやはり人類に特有な労働過程の特徴であり、それゆえフランクリンは人間を「道具を作る動物」と定義したのである。

労働手段は、原料と同様「過去の労働」の成果である、原料と異なるのは、生産物が生産されても、それですべて消耗しつくされてしまうのではなく、繰り返し生産過程で用いられ徐々に消耗してゆくという点である。このことが重要な意味をもつのは、労働手段に投入されている「過去の労働」が生産された生産物に「移転」するメカニズム(価値移転と呼ぶ)において、原料に投下された労働とは異なるメカニズムをもつという点である。(今回はこの点には立ち入らない)

労働手段には、工場などの立地のための土地も含まれる。また、労働手段は技術と密接に関わることから、マルクスは「どのような労働手段を用いて(労働が)なされるかが経済上の時代区分の目安となる」から、「労働手段は人間労働力の発達度の測定器であるだけでなく、労働をとりまく社会的諸関係の表示器でもある」とも述べている。確かに、技術の変化が歴史的な時代区分のための重要な指標になる場合がある。その典型的な例が19世紀の産業革命であるが、近代以前の時代にさかのぼったとき、歴史的な時代区分を技術を指標とすることができるかどうかは、実は簡単なことではない。というのも、近代以前の時代の先端技術の大半は産業革命を引き起こしたヨーロッパ世界ではなく、中国をはじめとしたアジアにあったからである。世界史がヨーロッパを「中心」として展開されるようになるのは18世紀から19世紀になってからである。^{*3}また、技術の進歩を何を基準として進歩と呼ぶのか、なぜ技術進歩が必要なのか、技術進歩は人類史に普遍的に見出せることなのか、など技術をめぐる一連の問いは、私たちの常識では判断すべきではない多くの意外性を伴ってもいる。この点は後に技術について論じる回で述べる。

6.2.5 生産手段

上記の労働手段と労働対象の二つをあわせて「生産手段」と呼ぶ。そして、この生産手段をもちいて行われる労働を「生産的労働」と呼ぶ。人間の労働は、労働手段を用いて労働対象に対して働きかける行為である。この労働過程では、二つのまったくことなる「労働」が関わりをもっている。一つは、労働手段と労働対象のように、すでに行われた労働(過去の労働)が不可欠であり、もう一つは、この過去に行われた労働の成果を用いて行われる今現在の労働があるということである。生産手段は新たな生産物の生産の過程で、労働者の労働を通じて消費されることになる。

今現在の労働とは、まさに労働者がリアルタイムで労働している状態であるから、これを「生きた労働」と呼び、過去に行われた労働を、この生きた労働との対比で「死んだ労働」と呼ぶことがある。

^{*3} たとえば、アンドレ・グンダー・フランク『リオリエント』、山下範久訳、藤原書店参照。

6.2.6 生産的消費と個人消費

消費という概念は、日常生活では生活のために商品が使用されることを指すが、上で述べたように、物が使用される目的には、このような生活での消費に用いられる場合（これを個人的消費と呼ぶ）と、生産活動で用いられる場合（これを生産的消費と呼ぶ）がある。

生産的消費が個人的消費と異なる点は、個人的消費が生産物を生きた個人の生活手段として使い果たすのに対して、生産的消費は労働の生活手段、活動する労働力の生活手段として使い果たすところにある。したがって個人的消費が生産するものは消費者自身であり、生産的消費が生み出す結果は消費者とは区別された生産物である。

ここでいう消費者の圧倒的大多数は＜労働力＞を商品として売る労働者でもあるから、「個人的消費が生産するものは消費者自身」ということは同時に、個人的消費が生産するものは労働者自身である、と言い換えるものでもある。

6.2.7 資本の下での労働過程

上で述べた労働過程の特徴は、どのような地域や時代、どのような技術や労働組織にも当てはまる一般的な特徴である、というのがマルクスの主張であった。資本主義の労働過程は、上の特徴を保持しながら、同時に資本主義に特有の特徴をもつというのがマルクスの考え方であった。しかし、以下で述べるように、資本主義的な労働過程が上記で論じられている労働過程の本質的特徴を保持しているといえるかどうか、あるいは上記の労働過程の一般的性質と矛盾しないのかどうか、については検討の余地がある。

■資本家の監督 労働過程は、労働者の主体的な行為によっては完結せず、必ず資本家の監督を伴うことになる。

労働者は第一に彼の労働が帰属する資本家の監督下で行なう。資本家は、労働が整然とおこなわれ、生産手段が目的に沿って使用されるように、すなわち原料が無駄にされず、労働器具が大切にされ、労働器具の消耗が労働における使用によって避けられない最小限度内にとどまるよう監視の目を光らせる。

なぜ労働者は資本家の監督を必要とするのだろうか？労働とは「労働過程は、使用価値産出のための目的に沿った行為」であり、しかも動物とちがって「彼はこの目的を知っており、この目的は法律のように彼の行為のあり方を決定し、彼はこの目的に自分の意志を従属させなければならない」ということについても自覚しているのであれば、なぜあえて資本家の監督が必要なのだろうか？上の引用には、資本家の監督がないばあいには、労働者は整然と労働しない可能性があること、生産手段の目的外使用がありうること、原料が無駄に消費される可能性があること、労働器具が乱暴に扱われる可能性があること、を示唆している。労働過程の定義を前提とした場合、このような資本家による監督の必要は労働過程の定義と抵触するのではないだろうか？

私が前回のべたように、労働市場で売買されるのは、労働者の潜在的な労働能力であって、労働能力そのものではない（だから私は、前者を＜労働力＞と表記して、労働力と区別した）という点が重要な意味をもつことになる。資本主義的な労働過程では、労働者は労働市場で資本によって労働の内容についての概要を提示され、じっさいに働く現場において労働の具体的な詳細を理解して労働することになる。だから、資本主義的な労働過程では、労働過程の一般的定義にあるような労働の主体が最初から自己の必要とする使用価値を獲得す

るために目的を定め、目的を達成するための構想を練り、この構想に沿って労働を実行するというふうにはなっており、構想に関する部分は資本の側に、実行行為だけが労働者の側に委ねられるという構造になっているのである。そのため、労働者にとって、労働過程の具体的な行為は、自己の使用価値的に必要に根ざしていないし、根ざすこともできない。このことが、労働過程における諸々の不具合をもたらすことになる。マルクスは「目的に向かう意志が注意力という形をとって現われ、それが労働の全継続期間を通じて必要とされる」と述べていたが、自己の必要のための労働であれば、どんなに辛い仕事であってもこれを実現しなければならないから、自ずと労働への意志や注意力は最大限の発揮をもたらすだろう。しかし、そうではないとすれば、当然のこととして、労働は魅力に欠ける可能性が高くなり労働への意志も低くなる。資本家の監督や監視は、こうした可能性への対応なのである。こうした資本主義的な労働の問題にマルクスは「疎外された労働」という概念を用いて論じたことがあった^{*4}が、『資本論』では疎外という概念を用いなくなり、労働者は資本家の監督のもとで最大限の労働への意志を発揮するという前提を置いた理論モデルを構築するようになる。資本主義的な労働において労働者は辛いと感じることもあれば生きがいを感じることもある。そのどちらかであるのかをあらかじめ決めてしまうことはできない。むしろ、資本主義的労働過程の理論では、辛いと感じる労働と生きがいを感じる労働との間を揺らぐ労働者の意識や心理のメカニズムに切り込むことが必要であろう。

■生産物の資本家による所有 資本主義的労働過程が労働過程一般と比べて、マルクスが指摘しているもう一つの特徴が、労働の成果（労働生産物）が労働の主体である労働者には帰属せず、資本家の所有物となる点を挙げている。

商品を買った人に商品の使用権は帰属する。じっさい労働力の所有者は、自分の労働を与えることでのみ、自分が売った使用価値を提供することができる。労働者が資本家の仕事場に足を踏み入れた瞬間から、彼の労働力の使用価値、すなわち労働力の使用たる労働は資本家に帰属する。（略）資本家はこの（労働力）商品に生産手段を付加することによってはじめてそれを消費できるようになる。労働過程は資本家買った物と物、資本家に帰属する物と物とに間の一過程である。

労働の成果が労働者に帰属しないのは、＜労働力＞が資本家に帰属することの結果であって、そのこと自体は市場経済の所有の基本的原則に基づいている。成果が自分のものにはならないような労働が資本主義的労働過程の基本的性格である以上、労働者は資本家の監督なしには労働しえないし、逆に、資本家は自己に帰属することになる生産物をもっとも効率的に獲得するように労働者の労働を監督・監視することになるのも当然のことになる。しかし、この「当然」のことが、いったいどのような意味で労働者にとって意味のある行為といえるのか、というより根本的な問題がここにある。資本主義的な労働過程では、常に労働者の「働く意味」をめぐる問題が生じることにならざるをえないのはこの所有の問題と深くかかわっているが、同時に、この問題が多くの人びとにとって人生の意味とか生きる意味に関わる深刻な問題として、時には社会問題として避けられないものになる。

^{*4} マルクス『経済学・哲学手稿』、1843-4年、各種の翻訳があるが、新しいものとして、長谷川宏訳、光文社古典新訳文庫がある。この草稿は、マルクスの青年期の著作であり、疎外された労働の概念は後年用いられなくなることから、マルクスの労働概念に大きな転換があったというのが定説である。わたしは、この青年期のマルクスの概念もまた重要な意義があるものと考えている。

6.3 マルクスの労働過程一般に対する見直し

6.3.1 労働過程の包摂と資本主義という歴史的時代の形成の関係

マルクスに限らず経済学が労働の概念を定義する場合に、資本主義的な労働から労資関係などの歴史的に固有とみられる社会関係を捨象して、労働を純粋な物の生産過程（使用価値の生産過程）とみなすことを通じて、労働の一般的で普遍的な定義を与えようとしてきた。このことは、資本主義であれ封建制の社会であれ、いかなる社会においても「労働」と呼ぶことができる固有の人間の行為が存在するはずだと理解することを意味している。そして、このあらゆる社会に共通する労働という行為を資本主義は資本が組織化しみずからの生産過程に取り込むと考える。言い換えれば、あらゆる社会に共通して見出せる労働過程を資本が支配することを通じて、資本は歴史の一時代を画するような存在となり、資本主義という歴史的な時代を築くことができるのだ、という理解をもたらすことになる。言い換えれば、市場経済が流通を通じて物を商品として売買するだけのシステムであれば、市場経済が歴史的な一時代を画することはできなかった（言い換えれば、古代にも中世にもこの意味での市場は存在した）が、資本が労働過程を自らのシステムに接合して資本の論理で労働過程を組織するようになることによって、市場経済は資本主義という歴史的な時代を形成することになったという見方である。

6.3.2 人間を対象とする労働

しかし、このような意味での労働過程を資本は全面的に支配することにはなっていない。とりわけ、資本主義社会においても、消費生活や子育てなど、家事労働と呼ばれる分野が広範囲に存在する。その一部は商品化されて市場が供給するようになるとはいえ、完全に市場の商品に取って代わることはできない。この意味で労働のすべてを資本は支配できない、ということになる。資本が支配する労働は、資本の価値増殖に適合的な分野に限られる。この意味で労働過程に対する資本の支配は部分的であって全面的ではない。

マルクスの労働過程論において家事労働のような労働が十分に念頭に置かれていないのではないかと、という疑問は、労働過程の分析でもっぱら念頭におかれているのが物を生産する労働に限定されているという点に端的に示されている。労働対象は自然や原料のような「物」に限られない。人間が労働対象となる場合がある。家事労働とは、＜労働力＞を日常的あるいは世代的に再生産する労働であって、労働者である（将来、現在、過去いずれであれ）者に対する労働なのである。それが直接人に対してなされる場合（育児や介護など）もあれば、衣食住の家族内での労働のように間接的になされる場合もあるが、いずれの場合も＜労働力＞の再生産に関わるという点で、人を対象とした労働である。

家事労働のように資本の外部にある労働以外にも人を対象とした労働は広範に見出せる。たとえば、政府の組織が行う住民などへのサービスあるいは管理は、それなくして国家や政府の機能が果たせないという意味で、もっとも重要な人を対象とする労働である。教育のような労働の場合、教師の労働は生徒や学生に対する労働であり、生徒や学生は労働対象となる。資本のなかで労務管理のように労働者の管理を仕事とする場合や商品を販売する営業の労働の場合のように買い手となるであろう人を相手にする場合も人を対象とする労働である。医師や看護師の場合も、患者が労働対象となる。理容師や美容師、カウンセラーなどから飲食店の接客の仕事や性産業における性的サービスに至るまで、人を対象とした労働は極めて広範囲に及ぶ。人を対象とする労働の大半では、コミュニケーションそのものが労働の一部を構成することになる。（これをコミュニケーション的労働と呼ぶ）なかでも人びとの認識や感情に働きかけるような労働ではコミュニケーションは非常に重要な役割を果たすことになる。

6.3.3 労働の再定義

労働を、人間の欲求や必要を充足するために、人間が自然との間で行う新陳代謝である、という一般的な定義に照らしてみた場合、資本主義的な労働はこの労働の一般的定義から少なからず逸脱している。すなわち、資本主義では、労働の構想（労働の目的）と労働の実行行為者とが異なる人格の間に配分される。前者は資本家に、後者は＜労働力＞を商品として売る労働者に割り当てられる。そのため、労働者は実際の労働の担い手であるにもかかわらず、労働の成果を彼または彼女の欲望を充足するための行為として行うのではなく、資本家の欲望を充足するために行うことになる。しかし、資本家も生産される商品の使用価値への欲望に動機づけられて労働過程を組織するのではなく、使用価値の生産はもっぱら資本の価値増殖（利潤）を獲得する手段でしかなく、労働過程の目的は、貨幣の取得ということになる。

このことは、資本主義的な労働が、具体的な有用労働が果たす商品の使用価値を直接の目的にはしないという特異な環境のなかで行われる労働であることを意味している。この点をマルクスも価値が使用価値を支配するような逆転現象が生じるとして指摘していた。もし、そうであるとすると、労働を人間の欲求を充足するための自然との間でなされる新陳代謝と定義してよいのだろうか？人間の「欲求」が貨幣に媒介され、具体的な使用価値への欲望が労働と生産の直接の動機にならない労働をどのように定義すべきか、という難問に私たちは直面することになる。

さらに、労働の対象も、人間の外部になる自然（およびその加工品である原料）を対象とするだけでなく、人間そのものを対象とする労働が広範囲に見出すことができ、その多くがコミュニケーションを労働とするとはいえた。人間を対象とする労働、コミュニケーション的労働をも「労働」の定義に含めるとすれば、労働はどのように定義すべきなのだろうか？

これらの問題について、私は、未だ確定的な答えをもっていないが、少なくとも次のことはいえる。マルクスが論じたように、労働を人類史を貫いてどの時代、社会にも共通する人間の行為として定義することはそもそも不可能ではないか、ということである。むしろ、労働という概念は、資本主義に固有の人間行為として限定して定義する以外にないのではないか。さらに、文化や社会が異なるのに応じて労働の概念も異なることが人類学の成果などから明らかとなっている。たとえば、日本の伝統的社会では家事労働を労働とはみなさない傾向が強かったし、そもそも「労働」という言葉そのものも近代日本のなかで用いられてきたものであって、近代以前の社会では一般的とはいえなかった。

近代資本主義は＜労働力＞を時間単位で商品化することを通じて、資本が必要とする人間の行為を労働とみなしてきたのであって、そもそも労働という行為があって、この行為を資本が労働市場を通じて調達してきたのではない、と考えるべきではないだろうか。言い換えれば、資本が人びとの行為のある部分を労働と呼ぶことによって労働市場で調達できるような行為類型を構築するのだ、とみるべきではないか、ということである。こうした考え方はまだ仮説の域をでない。今後検討すべき課題である。